

資料の収集とその活用

——アート・リサーチセンターの事例——

一、はじめに

去る六月八日（日）に、本学衣笠キャンパスに、第五十八回立命館大学日本文学会大会が開かれた。二〇一四年は立命館大学文学会の創立六十周年でもあり、その創立を記念し、今回の大会は、通常の研究発表等に加え、「立命館の『知』の財産——資料発掘・整理とその研究——」と題したワークショップも開催された。

本学の「知」の財産は従来の雑誌・書籍や古典籍資料等の紙媒体資料をはじめ、紙媒体の資料を撮影し、デジタルアーカイブとしてウェブ上で公開するデータベースの運用にも力を入れている。後者の場合は特に本学の独立研究科であるアート・リサーチセンターの活動が注目される。

一九九八年に設立されたアート・リサーチセンターは、創立当

李 増 先

初より資料の収集と整理に尽力してきた。紙媒体資料の収集は勿論、他の研究機関や博物館に所蔵される資料のデジタル化も盛んに行われてきた。その活動成果が認められ、本年度より文部科学省の「共同利用・共同研究拠点」として採択された。本稿はその活動を簡単に説明し、現在まで当センターの活動に関わってきた中で、いくつかの興味深い資料に出会えた。その中から二例をピックアップし、研究意欲の喚起をも兼ねて紹介する。

二、資料の収集と活用

本学図書館や文献資料室所蔵の貴重資料等は他の報告を参照されたいが、ここでは本学アート・リサーチセンターに寄託された資料または他機関よりデジタル手段で収集した資料について述べる。

本学アート・リサーチセンターに寄託された資料の中で、とり

わけ故藤井孝昭氏（一九一三～一九八三）の所有した資料であった藤井永観文庫¹が知られる。藤井孝昭氏は本学文学部を卒業後、生涯にわたり美術品や古典籍を蒐集してきた。氏の没後は、コレクションの散逸を憂慮した遺族等が翌年に財団を設立し、所蔵品の保存を努めてきた。二〇〇五年に財団が解散し、コレクション全点が本学に寄贈された。約四二〇点のコレクションの内、古筆切れ・絵画等の分野にわたり、学術的にも貴重なものが多いのが特徴であり、中には重要文化財・重要美術品も含まれている。それ以外は、林美一氏の林コレクションや俳諧の研究者として知られる櫻井武次郎氏の櫻井コレクションもある。

先述のような紙媒体の資料を多く所有している一方で、他の研究機関所有資料のデジタルアーカイブも多く所有しており、特に海外の研究機関のデジタルアーカイブに関しては、量質とも特筆すべきところがある。国別で列挙すると、英国の場合は大英博物館をはじめ、ヴィクトリア&アルバート博物館、ケンブリッジ大学図書館のコレクションのデジタルアーカイブを保有している。アメリカのボストン美術館やフリーア美術館、イタリアのローマサレジオ大学ドン・ボスコ図書館のマレガ文庫は近世期宣教師として来日したマリオ・マレガ神父のコレクションであり、他にベネチア東洋美術館やキヨッソーネ東洋美術館の資料のデジタルアーカイブがある。また、ベルギーの王立美術館やオランダの民族学博物館、ドイツの国会図書館、チェコ共和国のプラハ国立美術館、ナールプステク博物館等多くの国や地域の研究機関のコレク

ションのデジタルアーカイブを有する。

これらのデジタルアーカイブを利用し、現在当センターでは様々なイメージデータベース²を運営しており、とりわけ錦絵と古典籍資料の二つのデータベースは多く利用される。

そして、これまでに蓄積されたデジタルアーカイブ資源や若手研究者の成果報告の場として、二〇〇七年十月から二〇一二年三月までの間は、「GCOEセミナー³」と題した研究発表会を隔週に開催された。二〇一二年四月以降は、「新拠点セミナー⁴」として、毎月で開催される。

ここまでは本学の独立研究科であるアート・リサーチセンターの活動を簡単に紹介したが、その活動に関わってきた中で様々の資料を閲覧するチャンスが与えられ、その中で筆者の出会った興味深い資料を次節で取り上げる。

三、西園寺文庫蔵『歌合作法』

本学図書館の西園寺文庫の一部は二〇一一年度にデジタル化され、ウェブ上で公開された。西園寺文庫は、本学の歴史と深い関わりのある西園寺公望の蔵書が本学に寄贈されたものの、中には西園寺公望宛の書簡等をはじめとする公望関係の資料や愛読書が含まれる一方で、旧時西園寺家に伝わる宮中儀式書や歌書も含まれている。特に西園寺家の家業とされる和歌や琵琶に関するものは西園寺家独自の資料が多く、他見されない貴重な資料があるとい

うことは言及すべきであろう。そして、本節で取り上げる西園寺文庫蔵『歌合作法』という書物はまさにそのような資料である。

西園寺文庫には『歌合作法』（資料番号 09810036024）と題する一冊の書物があり、大きさは縦二十九・五糎の横二十三糎である。原本の状態は不明だが、現在の表紙と裏表紙は補修の際に付けられたものである。全部で八丁あり、本文は三丁にわたり書写されている。資料名の『歌合作法』は表紙を巡った扉の左肩に直接墨書されているところに由来するのであろう。

中身の料紙の状態から判断すると、元の書物は恐らく三丁分の本文の後に一枚の料紙を当て、計四丁のものであろうか、本学の図書館が補修の際に原資料の前後に遊び紙を当て、表紙を付けたと思われる。その際に元の書物を解体し、原資料の料紙の一枚一枚の裏に紙をあて、糊付けした。

岩波書店刊の『国書総目録』にはこの資料に関する情報は確認出来ない、その後の『古典籍総合目録』にも該当資料の情報がなく、恐らくその時点では該当資料の存在はまだ確認されていないと推測できる。それから国文学研究資料館は両者の情報をまとめ、更に日本全国の大学や図書館、文庫等の目録やデータベースから邦人のみの著作を増補し、「古典籍総合目録データベース」として運営し始めたが、該当データベースに『歌合作法』に関する情報を確認出来たのは編著者と所蔵のみであった。

それによると、該当資料の所蔵は本学図書館西園寺文庫のみとなっており、他の諸本を見ない。また、編著者については「柳原

資定問 称名院答」とするところが興味深い。周知のように柳原氏は日野俊光の子息、資明を祖とする一族であり、資定はその七代目の当主となる人物であった。朝廷に仕え、天正六年（一五七八）八十四歳で没するまでは、従一位権大納言であった。公卿であると同時に、歌人・故実家としてもよく知られた人物であり、戦国期の歴史を記録する貴重な資料としては『資定卿記』がある。また、称名院即ち三条西公条については改めてここに記す必要もないだろうが、父の実隆に和漢を学び、後奈良帝に『古今和歌集』進講した他に、『源氏物語』の注釈書である『明星抄』を著したことも知られる。室町後期歌壇に名を知られたビツクネームの二人は、私的な交流があったことは想像できようが、その端緒を一瞥できるのはこの資料である。

当資料の具体的な成立年等是不明であるが、巻末の奥書は次のようにある、

此一巻者柳原一位資定卿周防国滯／留御時歌合之作法如此御注付／称名院殿へ被尋に其返札写／之尤可謂重宝者哉

右の奥書からは、この資料は柳原資定卿が、周防の国（現山口県辺り）に滞在した時に、歌合の作法の詳細を、称名院殿（三条西公条）に尋ね、その返答の書簡を写した旨が記される。

詳細は紙幅の関係で省略し、拙稿を参照⁵⁾したいが、簡単に説明すると、懐紙の折りたたみ方や、文台、硯、墨、筆の置き場所

等の詳細が記されている。または題の選び方や詠歌後の披露の次第も記されている。そこから推測すると、恐らくこの資料は、编者自身の手元に置いておくという目的で、作成されたものであると推測できる。言い換えれば、旧時の公家が、詩歌会や和歌会を開催していた、その際に作法等を知らなければ、肩身の狭い思いをせざるを得ないだろう。当資料はそれに備えるためのチートシートとも言べきか、秘伝の書のようなものだろう。そこから考えると奥書の末尾に「尤可謂重宝者哉」とする一文も理解できよう。

また、和歌や和歌集に関する研究は数多くあるが、和歌会の儀式次第については、まだ研究の余地が多く残されており、そこから本資料は和歌会次第を知るための重要な研究材料であることも考えられる。

そして、本学のこのような活動があったためだろうか、近年西園寺文庫に関する研究論文⁶が多く公開され、研究が活発化を見せ始めたところにも注目されたい。将来、西園寺文庫の全貌が明らかになった暁に、公家文庫の研究にその成果を寄与できるのも想像できよう。

四、ケンブリッジ大学付属図書館蔵『杜律集解』

本学アート・リサーチセンターが長年にわたり、海外の研究機関所蔵の資料をデジタルアーカイブとして収集してきたことは、

前節で既に述べた。多くの国・地域の研究機関と連携してきた中で、昨年度にケンブリッジ大学図書館蔵日本古典籍のコレクションの一部が、デジタルアーカイブ化された。筆者はデジタル化資料の選定より関わってきたが、その過程にケンブリッジ大学の日本古典籍コレクションの成立や、コレクションの性格をも知ることができた。その中で特に興味深く感じたことについて本節で取り上げる。その前に、まず、ケンブリッジ大学付属図書館の日本古典籍コレクションの性格について述べる必要がある。

ケンブリッジ大学は三十以上のカレッジからなる、世界有数の名門大学であることは言わずも知れた事実であろう。また、大学の付属図書館が日本古典籍を数多く所有していることもよく知られている。一九二〇年代以来、ケンブリッジ大学図書館蔵の日本古典籍が影印本の形で日本に紹介されたのが始まりである。それ以来蔵書目録⁷が刊行され、コレクションの全貌が知られるようになった。

ケンブリッジ大学図書館蔵日本古典籍コレクションの多くはウィリアム・ジョージ・アストン (William G. Aston)、『アーネスト・メイソン・サトウ (Ernest M. Satow)』、ハインリッヒ・フォン・シーボルト (Heinrich von Siebold) のような黎明期の日本学者達個人旧蔵のコレクションの集合から成立した。彼らが幕末に日本で収集した書物や資料は彼らと共に英国に渡り、のちにケンブリッジ大学図書館に収蔵されるようになった。勿論、彼らのコレクション以外にも他方から寄贈されたものも多数あり、それらが現

在のケンブリッジ大学図書館の日本古典籍コレクションになった。

ウィリアム・アストンやアーネスト・サトウの名前は日本でもよく知られており、本稿では特に言及しないが、今回のデジタルアーカイブで注目したコレクションは、ケンブリッジ大学図書館が第二次世界大戦前に収集したジェイムズ・ロックハートのコレクションである。

一九三七年に、ジェイムス・ハルディン・スチュワート・ロックハート (James Haldane Stewart Lockhart, 1838-1937) の没後に、蔵書の二百数十冊が、管財人を通じて、ケンブリッジ大学に買収された。なお、コレクションの殆どは十七世紀から十九世紀に及ぶ和刻本漢籍類である。ロックハートは長く香港に滞在していた、生涯にわたり植民地の経営に力を尽くした。最後は香港総督に次いで、極東エリアの重要なポジションである、威海衛総監にまで任ぜられた人物である。また、中国学者としての業績も多く、著作に『左伝索引 (Index to the Tso Chuan)』がある事が知られる。

仮に彼もウィリアム・アストンやアーネスト・サトウのように、日本とゆかりのある人物であれば、特に疑問もないが、長く中国大陸に滞在していた彼のコレクションのほとんどが和刻本漢籍であることは興味深い。そこで注目したのは彼のコレクションの中の『杜律集解』という書物である。

『杜律集解』とは名前からもわかるように、「杜甫」の「律詩」

を注釈したものである。六卷六冊のものであり、明の邵傳が編纂し、陳学棻が校註した。一五八七・一五八八年 (万曆十五・十六年) の序がある。五言律詩三九五首 (四卷) ・七言律詩一三六首 (二卷) を所収しており、注は、語釈・典故・故事や、その詩作の時代的背景、あるいは杜甫の伝記上の背景の詳細が記される。杜甫の詩が日本において享受されるのは中世以降のことであり、近世期に入り、俳人の芭蕉が杜甫詩を好んでいたこともあろうか、のちに和刻本も上梓される。

その中で、ケンブリッジ大学図書館の『杜律集解』 (資料番号 FB563.24-25) の巻末の刊記には、

元禄九年龍集丙子季秋穀旦／神雉書肆美濃屋彦兵衛繡梓

とあるところから、元禄九年 (一六九六) 九月の吉日に、京都の書肆である美濃屋彦兵衛より刊行されたことがわかる。また、跋文に

元禄乙亥二月癸丑／宇都宮遯庵由的

とあるところから、元禄八年 (一六九五) 二月に宇都宮由的という人物が跋文を書いたことがわかる。宇都宮由的は江戸時代の儒学者であり、通称は三近、遯庵または頑拙と号されるのが知られる。宝永六年 (一七〇九) 五月二日に七十七歳で没した。幼時

より京都で、藤原惺窩門下の松永尺五に師事していた、同門に木下順庵・貝原益軒がいる。刊行年からは本書は彼の晩年の作であることは知られる。

『和刻本漢籍分類目録』によれば、元禄九年版『杜律集解』は二種類あり、版元はいずれも京都の美濃屋彦兵衛であるが、六卷十二冊の物を売り出した後、六卷六冊の物も出版した。二版は冊数や表紙、料紙は異なるものの、中身は同様であった。先述のように、近世期杜甫の受容は芭蕉の影響もあるうと考ええると、特筆すべき点もないように思われる。しかし、注目すべきなのはこの資料はもとジェイムズ・ロックハートという人物のコレクションである。

彼の生涯を見てみると、

ジェイムス・ハルデイン・スチュワート^⑧ロックハート（一八五八―一九三七）植民地省官僚、スコットランドのアーガイル地方生まれ。一八七四年、エディンバラ大学ジョージ・ワトソン学院に入学、七八年中退し、植民地省に入省。七九年、ロンドンに移住し、中国語を学ぶ。八〇年より中国広州で更に語学を習得し、八二年に正式に植民地省の書記官として登用される。以降書記官として任期を全うし、九五年香港総督の事務次官として任ぜられる。一九〇二年に威海衛総監に就任、〇八年KCMG勲章を叙勲し、一八年香港大学から名誉法学博士を贈呈される。二一年帰国し、ロンドン大学東

洋研究学院（現SOAS）理事に就任し、以降中国関係の論文および書籍を多数発表。

『Oxford Dictionary of National Biography』より抜粋、筆者訳

とあるのが確認出来る。しかし、ここからは彼のコレクションの始どが和刻本漢籍である疑問が解消されず、改めて和刻本漢籍の流通について考える必要があると考えられる。

和刻本漢籍はすなわち日本で出版された漢籍のことであり、その多くは日本に伝来した漢籍を復刻したものである。勿論、日本で出版されたため、漢文に返り点や読み下しが付される。和刻本漢籍の存在意義は原本漢籍の保存や、本邦における漢籍研究の状況を確認できる以外、文学史や文化交流史においても大きな意味をなす。しかし、本邦以外での和刻本漢籍はどの程度流通しているかは不明である。

本学中国文学専攻の客員准教授である金程宇氏の著作の前書き^⑨には、大陸における和刻本漢籍の流通について言及されている。氏は最初に和刻本漢籍が大陸に伝来した時期は不明であるとしても、宋元時代には五山版の書物が当時の僧侶の交流によって大陸にもたらされていることは十分に考えられるとした。蘭溪道隆の来日以降、大陸に渡った僧侶は三百を超すと言われ、将来した和刻本漢籍は相当な数量であろうが、ほとんどが散逸した。

清の時代に至っては、日中貿易が盛んになり、多くの書物は商船とともに大陸に渡来したと考えられる。清末までに将来した和

刻本漢籍の学術価値が認められ、『四庫全書』に撰入されたものもある。民国以降は日中の貿易活動に加え、個人の収集活動も顕著となり、和刻本漢籍を目的とした収集活動が注目される。また、特筆すべき点としては、在外公使館員等が和刻本漢籍の流入に對し大いに貢献したことにあるとして、民国以降の個人収集家に加わり、在外公使が意図的に和刻本漢籍を収集していたことがわかる。

ケンブリッジ大学図書館に収蔵されたジェイムズ・ロックハート原蔵のコレクションは、その殆どが和刻本漢籍であるという事実は、清末民国初期に、大陸側の商人や在外公使等が積極的に和刻本漢籍を収集していた背景がある。そこから当時の大陸には相当な数量の和刻本漢籍が流通していたことを推測できよう。その収集は商人や在外公使のような特権階級に限られていたとしても、香港や威海衛のような湾岸都市に滞在していたロックハートは彼らと接する機会のあるポジションに居たことは間違いないだろう。また、当時の和刻本漢籍の学術的価値も認められ、彼のコレクションは和刻本漢籍の学術価値を見込んでからの収集の可能性が高いとも考えられる。

五、おわりに

この度は「立命館の『知』の財産——資料発掘・整理とその研究——」と題したワークショップに本学アート・リサーチセンタ

ーの活動について簡単に述べた。また、その活動に関わってきた中で、いくつかの興味深い資料を見つけることができ、その中から二点取り上げた。

西園寺文庫蔵『歌合作法』は二〇一一年度の西園寺文庫のデジタル化を機に、該当資料は本学のみが所蔵する孤本であることが明らかになった。更に、該資料は室町後期の歌壇の重鎮であった三条西公条と柳原資定との間の書簡の往来から由来した資料であると判明し、該当資料の研究意義と学術的価値を見出すことができた。

次いで、ケンブリッジ大学図書館蔵『杜律集解』は、杜甫詩が本邦に受容され、近世期での享受の広がりと共に、テキストの需要も高まった。そのような歴史背景の中で該資料は出版され、大陸側にも渡った。そこからケンブリッジ大学図書館に帰するまでの間は、物語としてのロマンさえも感じる事ができた。

最後に本学の所有する資料が次々と公開され、資料へのアクセスが大変便利になり、これからの研究が活性化することを心より願ってやまない。

注

- (1) <http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/rarebook/cat629/>
- (2) 錦絵データベース (<http://www.dh-jac.net/db/aranshikiefsearchp.htm>) 典籍データベース (<http://www.dh-jac.net/db/books/search.php>) をはじめとし、その他に歌舞伎評判

記、版木、古地図、漆器、陶磁器等のイメージデータベースも展開している。

- (3) 過去のセミナー資料 (<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/GCOE/seminar/>)。

- (4) 過去のセミナー資料 (<http://www.arc.ritsume.ac.jp/lib/GCOE/newsseminar/>)。

- (5) 李増先「翻刻・立命館大学図書館西園寺文庫蔵『歌合作法』」(『平安文学研究 衣笠編』第四輯 立命館大学中国文学研究会 二〇一三年三月)

- (6) 近年(三年以内)刊行された西園寺文庫に関する論文は以下のようにある。

須藤圭、川内有子、中川佳保「他」(「翻刻・立命館大学図書館 西園寺文庫蔵『源氏物語』行間注記(空蟬巻・夕顔巻)」(『平安文学研究 衣笠編』第五輯 立命館大学中国文学研究会 二〇一四年三月)

小林孔、武田悠希、大坪舞「他」(「立命館大学図書館西園寺文庫所蔵『季吟法印 俳諧秘』の紹介」(『立命館文学』六三二号 立命館大学人文学会 二〇一三年七月)
大坪舞「戦国期における鷹の伝授：西園寺家・持明院家の鷹書から」(『芸能史研究』二〇一一年号 芸能史研究会 二〇一三年四月)

本多潤子「西園寺文庫所蔵西園寺実晴写『秀歌撰集』について」(『平安文学研究 衣笠編』第四輯 立命館大学

中国文学研究会 二〇一三年三月)

須藤圭、川内有子、中川佳保「翻刻・立命館大学図書館西園寺文庫蔵『源氏物語』行間注記(帚木巻)」(『平安文学研究 衣笠編』中西健治教授退職記念号)第四輯 立命館大学中国文学研究会 二〇一三年三月)

- (7) ピーター・コーニッキー、林望共編「ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録」(ケンブリッジ大学出版局 一九九一年)

- (8) 金程宇「和刻本中國古逸書叢刊」(鳳凰出版社 二〇一二年)

参考文献

金程宇編『和刻本中國古逸書叢刊』南京鳳凰出版社 二〇一二年

長澤規矩也著、長澤孝三編『和刻本漢籍分類目録』汲古書院 二〇〇六年

H. C. G. Matthew and Brian Harrison, Oxford dictionary of national biography: in association with the British Academy: from the earliest times to the year 2000, Tokyo, Oxford University Press, 2004.

大曾根章介(他)編『日本古典文学大辞典』明治書院 一九九八年

Nozomu Hayashi and Peter Komicki, Early Japanese Books in

Cambridge University Library : A Catalogue of the Aston, Saitow and von Siebold Collections, New York, Cambridge University Press, 1991.

国文学研究資料館編『古典籍総合目録』岩波書店 一九九〇年
岩波書店編『国書総目録』岩波書店 一九七六年
井上宗雄著『中世歌壇史の研究…室町後期』風間書房 一九八七年

(り・ぞうせん 本学博士後期課程)